あらゆる暴力に対して、NO、GO、TELL を身につけよう

新聞記事の「昨年来、下校時の子どもを路上の犯罪から守るために２万団体が『見守り』を続けているという。

不安が広がり、異質な人が不審者とされる。そのことへの監視対策が本当に安心・安全な社会なのかーー。

児童虐待や DV など暴力防止のために活動してきた著者が問いかける。」が目に止まり、「子どもが出会う犯罪と暴力－防犯対策の幻想－」を購読した。

著者は長年日米で、人権問題、子どもへの虐待防止、DV 等の暴力被害者支援に従事する専門職の人材育成とスキル向上を目的とする研修事業に携わってきたようである。

著者によれば、子どもが路上で出会う犯罪より、親、兄姉、親戚、知人、教師、等々の身近な大人から屋内で受けている暴力の方が圧倒的に多いにも拘わらず、路上での「子どもの安全、安心」のためという幻想から、下校時の大人による「見守り」のために、子どもたちは道草と放課後が奪われ、大人からの自由な時間で、「自分で感じ、自分で考え、自分で行動を選択する力」を蓄える機会もなくなってきているという。

それ故、著者は、防犯対策の整備より、子どもの内面にあらゆる暴力に立ち向かうスキルを身につけるべく、全国の多くの学校で、ワークショップも行っているようである。

その趣旨は、路上、屋内に関係なくいつ出合うかもしれない暴力に対して不安がるだけでなく、子どもに「安心、自信、自由」の人権意識を育み、あらゆる暴力に対して、NO、GO、TELL を身につけることであるという。

痴漢、通り魔等も暴力に他ならず、お年頃の方も参考になるスキルかと思います。

これらのことの詳細は、書籍の中で解説、説明されているので、ご一読されたい。

著者は、これらのことが、単に子どもに関係することだけでなく、不安を煽り、国民相互の監視体制の組織化は、国民を統制下に置こうとするあらゆる国家の常道手段だけに、不安の要因の特異性と普遍性を分けて認識して健全な社会の構築にまで言及している。

そう云われれば、テロ等の有事の不安を口実に「あなたの安全のために」との「国民保護法」とか、ミサイルの不安から、国家による暴力手段となりうる「武力を持たないと……」という最近の一部の論は、その現れか…。

（2006 年 10 月 5 日　記）